

■自由投稿

「コロナ下にも楽しみあり」 —オリックスのリーグ制覇を見届ける—

押田 良樹（11期）



令和3年は前年に続きコロナに明け暮れた年だった。不謹慎な言い方かも知れないが、コロナは悪いことばかりでもない。私の場合は、PITAPA 利用ほぼゼロの毎日のおかげで、好きな野球のテレビ観戦を堪能できた。

小学校5年生の時から阪急ファン、オリックスに変わってから勿論変わらずファン歴69年、年間を通してこれほどチームの戦いに密着したのは初めてである。

ケーブルテレビに加入しているので、オリックスの試合はホーム・ビジターを問わず、いずれかのチャンネルで必ず放映される。サンテレビでたまに中継があった昔とはえらい違いである。

本来であれば、シーズン143試合すべてを見ることができたはずだが、実は1試合見逃してしまった。8月31日札幌での日ハム戦、夕方いつものようにテレビのチャンネルを合わせると様子がおかしい。なんと、この日はデーゲームで既に終わっていたのであった。真夏に昼間の試合など予想もしなかったのが大不覚の原因であった。

チームは6月初旬まで例年通りの借金生活で下位に低迷していたが、交流戦が主体になる6月に入ると、6日から23日まで11連勝の快進撃で一気に借金返済、貯金を増やし6月20日には遂に首位に立った。何年ぶりのことだろう。

交流戦も12勝5敗で10年ぶりに堂々の優勝を遂げた。この6月の16勝4敗という戦績がシーズン優勝を決める大きな要因となった。7月、8月は計12勝9敗で乗り切り、首位をキープしていたが、9月に入り主砲吉田正尚が足の捻挫で16試合欠場したこともあり低迷、その間に好調ロッテの猛追を受け9月8日には遂に首位の座を明け渡してしまった。9月15日にはロッテに4ゲームの差を付けられ、残り30試合、頼みの吉田の不在もあり、念願のV達成には赤信号に変わりかけた。

しかし、26日に待望の吉田が戦列復帰、28日からのロッテとの3連戦を3連勝して一気に差を詰め、遂に10月1日には首位を奪還した。

ところが、なんとという不運か、その翌日のソフトバンク戦で吉田が死球を受け右手首骨折と判明、再度の戦線離脱となりシーズン中の復帰が絶望視される事態となった。しかし、残り16試合を吉田を欠いたチームは文字通り「全員で勝つ」を合い言葉に一丸となって戦い、10月26日のシーズン最終戦はエース山本が楽天を完封して、吉田不在の16試合を8勝6敗2分けで乗り切り、首位を堅持してシーズンを終えた。

この時点でロッテはなお3試合を残しており、1敗すればオリックスの優勝、1敗もしなければロッテの優勝という稀に見るスリリングな最終盤の展開となった。そして、27日の楽天対ロッテ戦は2-1で楽天が勝利し、ここにオリックスの1996年以来25年ぶりのリーグ制覇が確定したのである。思い出しても実に緊張の日々だった。

オリックス優勝の要因はいろいろあるが、私は次の点を挙げたい。

1. 中嶋聡監督の手腕

中嶋監督は前年シーズンの途中、成績不振で辞任した西村監督に代わり二軍監督から昇格して就任したのだが、二軍で選手の力量をよく把握し、一軍に上げた選手たちが期待通りの活躍をした。現役生活 29 年の経歴に裏付けられた選手掌握術は見事だった。

2. 絶対的エース山本由伸の存在

シーズン当初はなかなか勝ち星がつかなかったが、5月28日から実に15連勝、6月から4ヶ月連続月間 MVP を獲得、投手成績のタイトルを総なめにする大車輪の活躍だった。大事な試合で勝ちを計算できる投手がいたことは大きな強味だった。

3. 杉本祐太郎の開花

ラオウの愛称ですっかり有名になったが、入団時一緒に自主トレしたイチロー氏から、驚異の長打力を保障されたパワーに確実性を加え、入団 5 年目にして遂にその才能を開花させ本塁打王を獲得した。ここぞという場面での一打が期待できる頼もしい4番打者に定着した。

4. 新1・2番打者の定着

開幕後暫くは1・2番が固定できなかったが、5月中盤から福田周平、宗佑馬の1・2番が定着しクリーンアップにチャンスを繋ぐ場面が増えた。

福田はレギュラー獲得のため志願して内野から外野へ転向し、しぶとい先頭打者として機能した。

宗は福田とは逆に外野手から三塁手にコンバートされ見事に攻守に開花した。この新1・2番コンビの活躍は優勝に大きく寄与した。

5. 若手投手陣の台頭

2年目の宮城大弥の活躍は期待を上回るものだった。幼さの残る雰囲気からは想像できない巧妙且つ大胆な投球術で13勝4敗の見事な成績を残し新人王を獲得した。

そのほか、田嶋大樹、山崎福也の両左腕も共にキャリアハイの勝ち星を挙げた。山本とこの3人が長いシーズン中故障もなくローテーションを守ったことは他球団に比べて優位に立てた大きな要因の一つである。

以上は、昨季までと顕著に変わった戦力面の印象であるが、打の大黒柱吉田正尚の主砲としての変わらぬ活躍、チャンスに強いベテラン T岡田、メジャーから復帰のクローザー平野佳寿、平野に繋ぐ中継ぎ投手陣、投手陣を支えた3人の捕手陣、その他全員の働きがあったことは勿論である。

クライマックスシリーズでは、ファーストステージで楽天を破ってファイナルステージに勝ち上がった宿敵ロッテを無敗で退け、日本シリーズに臨んだ。相手はヤクルトスワローズ、奇しくも昨年リーグの最下位だったチーム同士の対戦となった。セリーグの試合はほとんど見ておらず、「弱いヤクルト」のイメージしかなかったため、日本一の可能性が高いと期待していたが、予想外にヤクルトは強く日本一は叶わなかった。

しかし、チームには日本一を争う力が備わったと確信し、2022年のシーズンを期待している。

私の周囲には阪神ファンが多い。中でも当会会長の松本耕司氏は相当熱心な阪神最ファンである。阪神はシーズン当初から快調に首位を走った。

かつて阪急が西宮球場を本拠地にしていた頃、かんべむさしというSF作家が「今津線シリーズ」と名付けて書いた「決戦・日本シリーズ」という作品があったが、その実現にはならなくても、オリックスとの関西シリーズになれば大いに盛り上がるだろうと期待していた。

しかし、阪神はオリンピック開けの8月後半、最大18あった貯金を13に減らし巨人に首位の座を明け渡してしまった。その後首位に返り咲いたが、今度は凋落した巨人に代わってヤクルトが猛烈な快進撃を演じ、9月22日には遂に勝率で阪神に代わりトップに立った。10月に入り阪神は追撃したがヤクルトも譲らず最終的にはゲーム差なしながら引き分け数の関係で勝率ではヤクルトが上になり涙を飲む結果となった。

シーズン中、松本会長とは折に触れ、お互いを慰め、励まし（「長崎の鐘」のようだが）あってきたが、最終的には松本会長は「慣れています、人生は修行の連続です。寅年は来年ですので」と意外と冷静であった。会長は藤浪晋太郎の復活と佐藤輝明の活躍が一番願っているようだ。私もそれを願っている。



野球に興味のない方には全く関係のない話で、改めて自分の「のぼせもん」振りには呆れる思いである。このようになったルーツ、昭和28年小学5年生の時、初めて西宮球場で阪急の試合を見てからの「私の阪急・オリックス物語」はまたの機会に改めて書いてみようと思っている。